



Title	ポストコロナに言語文化学ができること : マニフェスト
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 57-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77001
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ポストコロナに言語文化学ができること

——マニフェスト——

伊勢 芳夫

1. はじめに

2013 年に出版した拙著『「反抗者」の肖像——イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成——』¹ では、19 世紀における西欧の近代化言説形成の帝国主義的拡張により、その言説編成の網に取り込まれた非西欧圏がいかに変容させられていったかを中心にみた。その中で、多くの非西欧地域では、近代化という名の下で植民地政策が実施され、現地語や伝統的文化を否定もしくは他者化される一方で、西欧の経済圏の枠組みに組み込まれていったのである。一方植民地化を逃れた日本は、西欧の「模倣者／ハイブリッド」となり、西欧の垂流の近代化言説形成を周辺諸国へと拡張していったのであった。

共著として現在執筆している著書においては、19 世紀のイギリスを中心とする西欧帝国主義が第 2 次世界大戦によりアメリカの「新帝国主義」に取って代われ、その世界体制の下、次々に独立した被植民地地域が独自のアイデンティティ形成を模索していく第 2 次世界大戦直後から現在までを中心に扱う。被植民地であった地域のなかでは、特にインド、台湾のアイデンティティ形成の試行錯誤の過程を詳しく論述し、日本については、西欧の「模倣者／ハイブリッド」からアメリカの「模倣者／ハイブリッド」——いやむしろアメリカ「新帝国主義」に組み込まれた優等生というべきかもしれない——として経済一辺倒の「平和日本」に変貌したが、その劇的な変容のプロセスを GHQ の占領政策を分析することで明らかにするとともに、日本人が過去の帝国主義の記憶（不償）とどのように向き合おうとしているのかを検証する。そして、かつて東西冷戦時代の東の陣営の覇者であった旧ソ連（現ロシア）のヨーロッパでもなくアジアでもないナショナル・アイデンティティについても概観する。

ソビエト連邦の崩壊の後、アメリカの 1 国支配が継続すると思われたが、アジアの中で中国が台頭し、今やアメリカと世界の覇権を競う超大国になっている。その意味で、もはやポストコロニアル期は終わり、ポストコロニアル後の世界になってきている。その世界においては、われわれの思考・行動を規制する新たな世界規模の言説形成＝編成が生まれ

¹ 伊勢芳夫、マムヌール・ラハマン（研究協力者）、『「反抗者」の肖像——イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成——』、溪水社、2013

てきているのではないかと感じられるのである。それはこれまでの「グローバリズム」というアメリカの世界的な言説編成による規制の網ではない、明らかに別種のものである。そのような新たな言説形成＝編成は、IT などのテクノロジーを駆使し、われわれの思考・行動を規制する網を張り巡らそうとしている。そして、その言説形成のエージェントはおそらく極めて「匿名性」の強い存在なのかもしれない。

著者はかつて「文化」を限りなく増殖するアミーバに譬えたことがある。2020年の現在、新型コロナウイルスが世界で猛威を振るい、われわれの社会とその「価値の源泉」を変貌させようとしているが、その最中で感じることは、この新型コロナウイルスは、われわれの思考・行動を規制するという意味での「文化」と共犯関係を結び、世界を変質させようとしているのではないかということである。そしてその両者とも目に見えないということだけでなく、表面的には自由な／無症状な感染者がさらに多くの感染者／回復者を増殖していくという点で、テクノロジーによって引き起こされる変化以上にその変化は突発的・爆発的である。われわれは、グローバル化が進み、思わぬところからわれわれの世界、われわれの「価値の源泉」を一瞬のうちに変容させる新たな言説形成の進行する世界に生きているのかもしれない。このような世界にあって、従来の人文学の方法論を超克した言語文化学というディシプリンの必要性を訴えたい。

2. 言語文化学の可能性

言語文化学については、大阪大学言語文化学研究科の紀要やこの言語文化共同研究プロジェクトの報告書により多くの論文が発表され、また、これまでに『言語文化概論』と『言語文化学への招待』の2冊が大阪大学出版会から上梓されている。² しかしながら、それらに見られる「言語文化学」というのは複数のディシプリンが緩やかに結びついた集合体の名称として捉えられてきた感がある。一方、ここでは、依然として複数のディシプリンの集合体であるとしても、「今日の世界」を複眼的・統合的に解明するための研究方法であり、純然たる人文学研究と社会科学的な研究の横断的な研究方法としての「言語文化学」を問題にしているのである。人間社会の諸現象を解明するためには、社会科学的なアプローチと人文学的なアプローチを相補的に用いる必要があると考えるからだ。たとえば、人は貧困に陥ったからといって窃盗を働くとは限らないし、親から家庭内暴力を受けても自分の子供に暴力をふるうとは限らない。なぜなら内的世界にも外的世界と同様に独立したシステムがあり、外的要因をどのように受け止めるかはそのシステムによって決定されるからである。それは、文化や社会が、異文化や他の社会を受け入れる場合も同様である。また、少なくとも人間社会に関する限り、「虚構」の世界を研究する文学と、「事実」の世界を研究する歴史学においても、「虚構」と「事実」が明確な境界を持っているわけではないのは、モダニズム、ポストモダニズムの研究が始まった20世紀以降有力な考え方になっている。

² 藤本和喜夫・木村健治編、『言語文化学概論』、大阪大学出版会、1997年と木村健治・金崎春幸編『言語文化学への招待』、大阪大学出版会、2008年を参照。

われわれは確かに客観的な世界に生きているが、われわれの思い描く世界は内的産物である。われわれは外的世界を知覚することはできるが、概念として理解するのである。夜空を見上げると「月」を知覚することはできるが、「月」と認識するものは概念である。したがって、平安時代に生きた人々の「月」と21世紀に生きるわれわれの「月」は知覚的には変わらなくても、その意味は全く異なるのである。したがってわれわれは、「事実」の世界に生きていると同時に「概念」の世界にも生きているのだ。そして「概念」は内的世界においては必ずしも「知覚」による裏付けを必要としないがゆえに、概念上は「事実」と「虚構」は区別されえない。人の心の中では「太陽」と「神」は共存するのである。

また、文学と歴史学などの人文学、さらに社会科学のいずれも研究のツールとして主に言語媒体を使用しているという点で大いに重なり合うのである。したがって、内的世界の表象＝再現前化（リプレゼンテーション）を研究対象とする文学研究、社会的事実の表象＝再現前化（リプレゼンテーション）を研究対象とする歴史学、そして統計等の量的調査を用いる社会科学との横断的研究である言語文化的アプローチは、より「リアル」な世界を再現前できる方法であると信じる。それに文学における選良意識と、歴史学・社会科学における内面世界の軽視を補填するものとしての研究アプローチである。

このような言語文化学研究においては、「知の考古学的アプローチ」も必要になってくると考える。ミッシェル・フーコー（Michel Foucault）は、『狂気の歴史』（1972）において、³「狂気」に関する知——あるいは、共通認識——の変遷を、フランスを中心としたヨーロッパの論文、文学作品、記録文書、書簡、日記、帳簿、絵画等からそれに関わる記録を数多く収集し、通時的、及び共時的な影響関係を調査している。それによってみえてくる「狂気」に関する言説形成＝編成は、過去の言説の継続、衰微、あるいは復活の過程と、同時代のいくつかの領域の言説の影響、対立、もしくは併存関係により、大きな「狂気」言説の形成＝編成が推移し、個々の現われ（言表行為）——つまり、パロール——を生み出していく。その現れとは、文字として著作や書簡等の中に現れる場合もあるし、絵画の中や、「狂気」の認定方法、「狂人」に対する処置の在り方、臨床医の治療方法、学問的研究の中身に現れるのである。そこでみえてくるのは、時間軸に沿って狂気に対する偏見が紆余曲折を経て是正されていくような楽観主義的進化論ではなく、キリスト教における「狂気」の位置、倫理的な善悪の境界の線引き、したがって「狂人」への待遇の在り方、哲学的な理性と非理性の問題、自由との折り合い、臨床的な治療方法、狂気の無罪性の再発見、学問的な「狂気」の定義のいずれに対しても動揺を与え、複雑な変化を促すか、あるいは反動的な態度が生み出す臨界的・包括的変異である。それは単に既成の言説にのみ影響を与えるのではなく、「狂気」の学問的な認識の変容が、新たな言説——心理学や精神分析——を生み出していくのである。

この知の考古学的研究方法を言語文化学に適用しようというのである。その先例としては、すでにこの種の研究の古典として位置づけられるエドワード・W・サイード（Edward W.

³『狂気の歴史』（田村俣訳、新潮社）、『監獄の誕生』（田村俣訳、新潮社）を参照。

Said) のインド以西、及び、アメリカ合衆国を扱った『オリエンタリズム (Orientalism)』がある。この書において、サイードは経済や政治システムだけではなく、帝国主義の言説的側面を明らかにした。もっとも、フーコーがその言説形成＝編成を再現する作業に際して、大きな言説を構成する下位の言説のいずれに対しても等距離に記述しようと努め——その意味で構造主義的であるが——、そのことによって、それぞれの下位の言説の影響・反発・乖離の関係がみえてくるのに対して、サイードの『オリエンタリズム』においては、下位の言説の共犯関係をことさら強調するので、反発や乖離の側面がみえてこない。そのために「西洋」の白人優位主義が際立って現れてくるのであるが、固定的な図式になってしまっている面は否めない。つまり、『オリエンタリズム』そのものが政治的に偏りのある研究ともいえるのである。⁴

つまり西欧語（あるいは、英語）が 19 世紀以降の世界の言説形成＝編成を独占していったのであるが、必ずしも一枚岩的に、一丸として非西欧を飲み込んでいったのではなく、西欧の言説においても、相対立する下位の言説が、大きな言説形成＝編成の動きの中で反発や乖離を繰り返していった。もちろん、ホミー・バーバ (Homi K. Bhabha) のような優勢な西欧の言説形成に非西欧の文化の介在・交渉が存在するとしても、⁵ ハイブリッド的変容が単に辺境地域だけでなく、大きな西欧の言説形成＝編成の中にも反発や乖離の要因を生み出していった。そうして、これらの複合的な動きが総合して、世界的な言説形成＝編成を生み出していったと思われる。

19 世紀以降の世界を覆う西欧語による最上位の言説形成＝編成に対して、下位の言説形成＝編成は単純にピラミッド型に配列されているとは言えない。確かに、確固とした階層が構築された社会、植民地においてはそれに沿って下位の言説形成＝編成が起こっていくことはあるが、英領インドといえども完全なヒエラルキーになっていたわけではなかったものであり、上位の言説編成の影響力が及ばない共同体では、その共同体の言語を中心として言説編成が機能する。まして日本においては、西欧の言説形成＝編成の影響力は間接的なものであり、その構成員は日本語の言説編成の中で思考し、判断をする、つまり文化の拘束を受けるのである。少なくとも、第 2 次世界大戦の敗戦の時まではそうであった。

ここで「言説」という概念の使用に関して簡単な説明をする必要があるであろう。なぜならこの「言説」は、これまでさまざまな意味合いで使われている用語の 1 つであるからである。もちろん、学術用語ではない一般的な意味としても使われてきた言葉でもある。

日本において、1990 年代から、“discourse”（フランス語では、“discours”）の訳語として

⁴ サイードのフーコー批判に、「フーコーの信じるのは、一般的に個々のテキストや著書はほとんど重要ではないということであるが、経験的に、オリエンタリズムの場合（そしておそらくそれ以外のどこにも）、そのことは事実ではないと思う。したがって、私の分析ではテキストを精読することによって、個々のテキストや著者と、テキストが寄与する複雑な集合的編成との間の弁証法を明らかにすることを目的とする。」(Edward W. Said, *Orientalism* (New York: Vintage Books, 1979), pp. 23-4) とある。「テキストを精読」することの重要性はその通りだと思うが、特定の「個」に過剰の意味を与えてしまうと、「編成」の全体像を見誤る可能性はないであろうか。

⁵ Homi K. Bhabha, *The Location of Culture* (London and New York: Routledge, 1994) を参照。

「言説」、あるいは「ディスコース（ディスクール）」という用語を使って、文学・文化を論じる論文や研究書が書かれるようになった。その場合、「言説」という概念を、誰それ、またはある集団から発せられる言葉に含まれる「イデオロギー」、あるいは「真意」という意味で使われる場合が多い。このような「言説」をある個人や集団がもつイデオロギーと等質の概念として用いる場合では、社会というものが個や集団の雑然とした集まりとして構成されており、その中で、権力をもった個人、あるいは等質なイデオロギーをもつ集団が、それ以外の個人や集団を「暴力」といった強制力をもつ装置で抑圧するとともに、自らの「欲望」を正当化するイデオロギーを押しつけようとするという考え方がその前提にある。確かにそのような側面は否定できないであろう。しかしながら、現実の社会の場においては、このような意識的、意図的に自らの価値観やイデオロギーを発話する言葉に含ませて、聞き手を誘導しようとする積極的な欲望を持っている場合だけではないであろう。「文化的拘束力」の下で、われわれは消極的、あるいは無意識的に何らかのイデオロギー、価値判断を含んだ思考を行い、言葉を発することの方がはるかに多いのである。たとえば、現代社会において、いかに暑い日でも男性は公式の場ではスーツを着ることが文化的に拘束されてきた。それが、近年になって「クールビズ」という対抗言説が力をもってくると、背広を着るのがはばかれる気持ちになる。この場合、個人の快適さや趣味以上に、これから向かう場所がいずれの言説に支配されているかがより重要になってくるのである。

社会の物理的な暴力装置によってのみ言論の自由が抑圧されたり奪われたりするものであり、もしそのような暴力装置による抑圧がなければ心から信じる主義や価値に基づいた意見や感想を自由に述べることができると、人は考えるものであるが、しかしながら、いかなる社会においてもその構成員がその社会で使用される言語の語彙と文法を駆使して自分の考えを自由に発話することを抑制するのは、権力者の暴力装置だけではない。たとえ剣やピストルで脅かされる心配がない場合でも、人は「言わされる」、あるいは、「言えない」というような状態に常に置かれているのである。このような拘束装置は、社会に警察や軍隊というような暴力装置が機能しているだけではなく、家庭や学校やマスコミといった社会的制度によって刷り込まれる、いわばアントニオ・グラムシ (Antonio Gramsci) のいう「文化的ヘゲモニー」の支配下におかれ、⁶ 言語という媒体を通して個人がコントロールされているからである。もしある人が完全に「文化的ヘゲモニー」によってコントロールされている場合には、「言わされる」、あるいは、「言えない」という意識が喪失し、あたかもそれが自分の意志でそう言っているかのような錯覚に陥ることになる。

上述のような意味で「言説」は、個人の価値観やイデオロギーの表明を指すことも排除しないが、主に言語を媒体として社会構成員のすべてを「文化的ヘゲモニー」の支配下に置く言語のもつ発話規制・反復機能、あるいは、「文化的ヘゲモニー」の規制のもとで発話され、反復された言語、言語から生み出される価値体系、認識世界、思想、あるいは、その全体を意味する概念と考える。

⁶ 文化的ヘゲモニーに関しては、サイードの *Orientalism* の pp. 6-7 を参照。

ところで、フーコーの言説形成＝編成の考古学的方法論では個々の言表行為（パロール）——言語、行動、判断等——を発する場としてのエージェント（個人）の言説編成内の立ち位置の偶然性を特に問題にしていなかったが、人はその言動が時間軸によってのみ支配されるのではなく、同じ時間に生きる複数の人間は、その時代の複数の言説支配のどこに位置するかによって、その言動に差異が生じる。たとえば、ある人間が国家権力の中核にいる場合と反体制側にいる場合、社会階層の上位にいる場合と下位にいる場合、マジョリティにいる場合とマイノリティにいる場合、思想・宗教の主流にいる場合と周辺にいる場合、あるいはその人物が外部者である場合とでは、その言動がまったく同じであるとは考えられないのである。そしてIT技術の飛躍的な発展の中、「ネット (SNS) 共同体」というものが増殖・拡張し、これまでの共同体にはない言説編成を生み出すとともに、個人の立ち位置は現実の社会だけではなく、仮想空間にも軸足を置くことになってきている。

この現実／仮想共同体において個人は様々な「文化的ヘゲモニー」の網の中で反復を繰り返すわけであるが、しかしながら、すべての個人が単純にその共同体の反復を繰り返すわけではない。もちろん、差異を無視できるような単純な反復を繰り返す反復者の方がマジョリティであろうが、おかれた位置と個人の特性との間に乖離がある場合は、その反復には明らかな差異を含有することになる。そして、そのような「反復・差異」の繰り返しの中でさまざまなヴァリエーションのある言動が生まれてきて、現実／仮想社会の主流の言説編成自体が変革されていくことになる。

このような「反復」の繰り返しによる固定化の動きと、「差異化」による変革の動きは、個人、階層、社会、国家間、民族間、仮想世界のすべてのレベルで起こっており、「グローバル化」という劇的に社会を変革するプロセスの中でさまざまな解体・変革をもたらすわけであるが、さらに外部者の立ち位置にある者の存在も言説編成を論じるにあたって無視することはできない。それが単なる傍観者であっても、また積極的にその社会にコミットするにしても、言説レベルにおいては、両者ともその言説編成に大きな影響を与える可能性を持っているのである。以上のような知の考古学的方法論を駆使した言語文化学において、ますますグローバル化した、ポストコロニアル後の世界を、動態論的にとらえていこうというのが、このマニフェストの主張するところである。

3. おわりに

ポストコロナにおいて、あるいは、AIが支配すると予想される近未来において、人文学の研究は反デジタル、つまりアナログのままではますます影が薄くなっていくであろう。一方で親デジタルであろうとすると、その存在価値を喪失することになる。そうではなく、超デジタルとして、複眼的・多角的な視点からこの世界を読み解くことで、2進法的方法論では見渡せない新たな世界像が見えてくるのに違いない。そのための武器として、言語文化学の可能性は大きいのではないだろうか。